

八重葎やえむぐら

あかしりよう

一

やえむぐら
八重葎しげれる宿のさびしきに人こそ見え
ね秋は来にけり
恵慶法師（拾遺集）

愛妻（と、いきなりのろけてすみません）
のトモ子を亡くしてから初めての秋がやつて
きました。いまは、トモ子と築き、守ってき
たこの家の縁側にひとりさびしくたたずん
でいます。

トモ子に先立たれてからというもの、私は
もう、何をするにも気力が湧かず、こうして
ただぼうつと縁側で座って過ごしていること
が多くなりました。庭の草取りもおろそかに
なり、雑草が生い茂っている中で、訪れる人
もないまま、秋を迎えてしまいました。

この縁側は庭——といっても集合住宅のベラ
ンダを少しばかり広くしたていどですが——に
面していて、目の前の生活道路とは生垣で隔

てられています。

トモ子も私も、この小ざつぱりした生垣が妙に気に入っていて、ときどき剪定用のせんていのはさみを使って、自分たちできれいに切りそろえたりしたものでした。そして生垣の向かい側には、狭い生活道路を間に挟んで小さな児童公園、さらにそのはるか背後には雑木林に覆われた小高い丘があります。私たち夫婦はよくこの縁側に腰を掛けて、この生垣とその向こうにある雑木林をながめたものでした。

私は東北地方の人口10万人ほどの町に生まれ、地元の大学を出て、東京のある中堅メーカーに就職しました。大学での専攻は国文学で、これといったつぶしの利く専門知識も資格もなかった私は、会社で営業の仕事を担当することになりました。当時も今も、営業といえは、ノルマに追われてきつそうなイメージがあります。私は内心「うまくやれるかもしれない」と思いました。なぜかというところ、私は論理的な話をするのが、どういふわけか

得意だったからです。いわゆる“へ理屈”がうまいとでもいうのでしょうか。私は子どものころから口げんかで負けた記憶がほとんどないのです。案の定、私は製品の売り込みで得意先企業を増やしていき、自他ともに認める“優秀な営業マン”の一人となりました。

ところが、いっぽう、会社という組織を離れてプライベートの場になると、私は一転して口が重くなってしまいます。ときどき仕事のアあとで会社の人たちと飲みに行ったときなど、どのような会話を切り出したらいいのか、途方に暮れ、黙り込んでしまうのでした。こういう場での私は、自分から話を仕掛けられず、ひたすら相手が自分に何かの話題、それもできれば仕事や社会についての“論理的な”話題を投げかけてくるのを待っている状態でした。

私は自分そのものに自信がなくて傷つきやすく、絶えず相手にどう思われるかを気にするところがあつたのかもしれない。だから、

仕事上の会話のように、相手が取引を断つたり批判したりしても、それは「自分ではなくて、会社がそのような評価を受けた」ということにして済まされるのですが、生身の自分に対する評価が問われる場になると、なかなか話を切り出せなくなるのです。

とりわけ色恋沙汰の場面になれば、それは男性としての自分自身が相手の女性にどう思われているかということになるわけですから、まだ若いころには、同世代の女性を前にして、ほとんどまともに言葉を出せない状態でした。

そんな私がトモ子と出会ったのは、しばしば取引話のために訪問していた得意先の会社の近くにある喫茶店でした。

そのころは現在と違い、営業マンの行動を拘束するようなツール、たとえばスマホや携帯電話はおろか、ポケットベルさえもない時代でしたから、要領よく得意先での用件を済ませたあとは、その喫茶店でちゃっかりひと

休みできたものでした。まさに古き良き時代だったといえます。

そしてその喫茶店でウェイトレスのアルバイトをしていたのが、トモ子でした。彼女はあるアングラ劇団に入っていて、将来本格的な女優としてデビューすることを夢見ていました。

その喫茶店は、朝のモーニングの時間帯と夕方以降は多くの客でにぎわっていました。平日の日中は空すいていて、ときには客は私だけということもありました。そんなときトモ子は、その劇団の公演のチケットをよく私に勧めたりしたものでした。彼女はなじみの客にはよくこのように、チケットを売り込んでいたようです。有名な役者を多く抱えている大劇団とは違い、アングラ劇団の公演チケットはこんなやり方で地道に売っていく以外になかったようです。

トモ子は元来、人付き合いのよい話好きな女性であり、その上劇団で鍛えられたせいも、

声がよく通ってはきはきとした話し方が身についていました。ですから、私の客席にコーヒーを運んできた際などに彼女にいろいろ話しかけられても、私は変に意識することなく、気楽に応じることができたのでした。

あるとき私がその喫茶店に入ると、トモ子は注文を取りにきた際に例によってチケットをもつてきて、こういいました。

「こんどの劇で、初めて大きな役をもらったから、ぜひ見に来てね」

私は演劇にはそれほど興味がなく、これまで彼女からチケットを勧められても、いつも適当にお茶を濁して断ってきたのでしたが、今度は彼女が大きな役を演じるというので、どういうわけか、このときは

「それなら、ぜひ見てみたいものだ」

と、そのチケットを買いました。もしかしたら、このときにはもうすでに、トモ子に親しみ以上のものを感じ始めていたのかもしれない。

それから数日経った日曜日に、私はその演劇を見に、下北沢にある劇場に行きました。『忘れ去られた苦惱』というタイトルの劇で、そのあらすじ自体は、一人の同じ男を恋してしまった二人の女の精神的苦悩という、よくある三角関係を描いたありふれたものでした。そしてそこでのトモ子の配役は、最終的に男の愛を獲得するヒロインではなくて、もう一方の恋に破れる女にあてられていました。

舞台上でのトモ子は、失恋に傷ついて苦悩し、男とヒロインの前をこつ然と去っていくその女を見事に演じきっていました。とりわけ、その女がひとりで舞台の中央に進み出て胸をかきむしり、髪を振り乱しながら失恋のシヨツクで悶絶してしまうシーンは、まさに圧巻でした。その演技力は、映画やテレビドラマでみる大女優のそれと比較しても、何ら遜色そんしょくはなかったと思えました。

私はこのときの感動をできるだけ早くトモ

子に伝えたくて、例の喫茶店に行ける機会を待ち望みました。そしてその機会は十日ほど経ってからようやくやってきました。私は得意先へのあいさつ回りを迅速に済ませたあと、駆け込むようにその喫茶店に入っていました。ところが、その日はあいにくすでに何組かの客がいて、なかには仕事の打ち合わせでそこを利用して、すぐに出そうもない客もいました。

それらの客たちの間を、トモ子はかいがいしく動きまわっていたので、なかなか私と話をする余裕がありません。私はそのときがもちろん「勤務中」であったため、あまり長時間その喫茶店にいることはできず、トモ子との話の機会を待ちながら焦っていました。そういう思いで彼女を“観察”してみると、そのきびきびとした態度、そのすらりとした肢体が、あの舞台での鮮烈な印象と合わせり、自分が彼女に強く惹かれていくのを実感しました。この店を訪れた当初には、

「あのアルバイトの小娘が」

としかみなしていなかったトモ子を、このときから“女性”として強く意識するようになったのです。

このように私の胸は高まっていたのですが、結局この日は店が空すきそうにはなく、私は「時間切れ」で会社に戻らざるを得なくなりました。そのとき、私は普段の自分なら到底思いつかないような、大胆な行為にできました。会計の際にレジに立ったトモ子に、

「明日の午後7時、〇〇公園の入り口で待っています」

と書いたメモを渡したのです。彼女はそれを受け取って読み終わると、私の顔をちらっと見ましたが、そのまま無表情で会計を済ませました。私はその日、会社に戻ってからも、どこかそわそわしたところがありました。何しろ、生まれて初めての「デートの誘い」だったのですから。

その翌日、私は仕事があまり手に着きませ

んでした。この日は例の喫茶店の定休日なのでトモ子を思い切つて誘つてみたものの、「はたして、あの人は来てくれるだろうか」ということをずっと考えていました。

運命の7時に胸をどきどきさせながら、おそるおそる〇〇公園に行きました。するとそこに：いました！そのときの彼女は、いつものウエイトレス姿とはまるで別人のようでした。おそらく、自分が持っているなかでいちばん気に入っていると思われる衣装を身にまとつていて、化粧もこれまでより少し入念に施してありました。いつもトモ子のことを「幼い」と思っていた私は、夕闇のなか、街灯に照らされた妖艶ようえんな彼女を前にして、緊張のあまり、「やあ」と声をかけたつきり、しばらく口ごもっていました。彼女はそんな私の気持ちを察したかのように、お茶目な表情でニコツと笑つて、

「わたしがここに来ないと思つていたんでしよう?」

と気分を和らげてくれました。

私もそこで作り笑いを浮かべ、そこから見える場所にある喫茶店を指さし、

「あそこの喫茶店に入ろうか」

といいました。夜の7時ともなれば、「お茶」ではなく、「夕食」の時間なのですが、こういう場が初めてだったことと、トモ子といえば、「喫茶店」という固定観点しかなかったので、このようなおかしな提案になりました。その点、トモ子のほうが常識人でした。

「もうこの時間だから、あそこのレストランに入りましょうよ」

と、「レストラン」という看板がかかっているものの、実際には小じんまりとした洋食屋にしか見えないような店に入りました。

私たちはそのレストランのテーブルの席に着くと、先日の演劇について話を始めました。私は高邁こうまいな“演劇論”なるものについては少しの知識もありませんが、しかし先日の公演で彼女が見せた迫真に迫る演技について

は生々しい記憶があり、それこそ堰を切ったような勢いでそこから受けた感動を語り続けました。

それに対して、トモ子は最初のうちはとてもうれしそうに笑っていましたが、私が熱く彼女の演技のすばらしさを語っていくにつれて、次第に涙を浮かべて私の目をじっと見つめるようになりました。

私はトモ子と演劇についてだけでなく、おたがい自身について、すっかり意気投合できたように感じました。だから彼女が食事のあと、自分のアパートに招き、そこで演劇以外のことを語りあった際にも “自分そのものを何の躊躇ちゆうちゆうもなく、さらけ出すことができたのだと思います。私はその日、そこでひと晩過ごしました。

それ以来、私はトモ子が出演する公演には必ず足を運ぶようになり、また彼女と頻繁おうえに逢瀬を繰り返すようになりました。私たちの関係は例の喫茶店のマスターも半ば公認する

ようになり、私がそこを訪れた際にトモ子が「この人と少し話をしてもいいかしら？」

と許可を求めると、彼はにっこり笑って配せをみると、彼はにっこり笑って

「ああ、いいよ」

というような感じで、うなずくといったことが日常的になりました。

このような状況が続き、私はトモ子との結婚を真剣に考えるようになりました。だがしかし、私はそれ以上に、女優としてデビューしたいという彼女の夢をかなえてやりたいと思っていました。とはいっても、ひとりの平凡なサラリーマンの私にはこの点で力になれるようなことはありません。だからこのときの私は、彼女を絶えず励ましながら、その努力が成就するのをできるだけ暖かく見守ってやるくらいだったのです。とはいっても、もし本当にこの夢がかなって彼女の名が売れてしまったら、彼女は、もう私の届かないところに行ってしまうことになりますので、私の

心境は複雑でした。

けれど、幸か不幸か結局この「心配」は現実のものになりませんでした。トモ子は、これからという大事なときになって、過労とストレスで病気になって倒れてしまったのです。そして療養している間に、他の劇団員に取って代わられてしまい、復帰するころには劇団の中での彼女の役割はなくなってしまいました。何しろ競争の激しい世界のことだったのです。

このときのトモ子の落ち込み、憔悴ぶりは、いま思い出しても本当に気の毒な限りで、私が彼女に

「またここから、がんばればいいさ」

などと形ばかりの慰めの言葉をかけたところで、少しも心に響かなかつたに違いありません。だいたい、「がんばればなんとかなる」のは、営業成績のように数字がものを言う世界の話で、役者のように、「雰囲気」や「格」といった数字に表すことができないもので立

ち位置が決まる世界では、一度大きなチャンス逃した無名の人間がいくら「がんばった」ところで、もういちど這い上がることは不可能といってもいいでしょう。心身とも疲れ切ったトモ子は、それからしばらくして劇団を辞めてしまいました。

数か月後、私はトモ子と結婚しました。実はこのことはトモ子には決まっていなかったことなのですが、その当時、私は会社の重役の娘との結婚話を勧められていました。しかし私は、あっさりこの話を断って、トモ子といっしょになったのです。会社の同僚には、「これでお前の出世の道はなくなった」といわれましたが、私はいまに至るまで、この選択について後悔したことは一度もありませんでした。

結婚後約一年間、私たちは手狭なアパート暮らしをしていましたが、それから千葉県市川市の“内陸部”にいま住んでいるこの家を建てました。私もトモ子も地方の出身で都会

のごみごみした環境から離れたいことと、何よりも「私たちの子ども」をもう少し自然環境に恵まれたところで育てたいからでした。

私たちはふたりとも、三人きょうだいのなかで育ったので、子どもたちに囲まれたにぎやかな家庭を望んでいたのです。

家を建てたところは、その後数年経ってから鉄道路線の伸長により、東京都心まで電車で乗り換えなしに40分以内で通える場所でしたが、それにしては、自然が多く残っていて、いまでも雑木林に覆われた小さな丘がいくつもあり、梨畑が点在しています。

私たちはプライバシーも考慮しつつ、この自然と調和し、周囲との隔たりを大きくしたくない意図から、敷地の境界をブロック塀ではなくて生垣にしました。そうすれば、その脇の生活道路を行きかう通行人の息吹を感じられますし、何よりも道を隔てた児童公園で遊ぶ子どもたちの楽しそうな歓声が十分に聞き取れるのです。世の中には、「子どもの声

がうるさい」といって、近所の保育園建設に反対する人もいるようですが、私もトモ子も子どもの歓声を聞いてほほえましいと感じこそすれ、それを「騒音」などと感じたことは一度もありませんでした。

また当時は、結婚して間もない人に対して、職場内で、「お子さんはまだ？」と聞くのが一般的でした。いまでこそ、こんな質問をすること自体、「セクハラの疑いあり」とされかねませんが、そのころは、聞くほうも聞かれたほうも、特に何の違和感も感じなかったのです。私もご多分に漏れず、よくそう聞かれましたが、そんなときは、

「がんばってはいらんだが、まだ」

と応えたものでした。実際に私はその方面で「がんばって」いたのです。

さらに私がこのような会話に続いて、

「早くかわいい子どもの顔が見たい」といったら、

「おまえは、子どものかわいところしか

見てないから、そう言うんだろが、オムツの世話をしたり、夜中に泣かれて起こされたりしたりして、大変なんだぞ」

とよく言い返されました。

確かにそのとおりなのでしょう。だけど、トモ子も私も、「早くそういう苦労もしてみたい」とずっと思い続けていたのでした。

しかしながら、私たち夫婦には結局子どもはできませんでした。そのうちに、例の児童公園からの子どもたちの歓声を耳にすると、トモ子の顔に一瞬微笑みが浮かぶものの、すぐに沈み込んだ表情に変わったり、小さな子どもを連れた近所に人たちとすれ違った際、かなり無理して作り笑いをして、「まあ、かわいい」といったあとで、私のほうに顔を向けたとたん涙を見せたりするようになりましました。私はこんな悲しそうなトモ子の姿を見るのがいたたまれなくなりました。

このような状況の中で私の仕事もさらに忙しくなり、また住宅ローンの返済を進めてい

かなくてはならないので、私の帰宅時間は夜遅くなっていきました。できれば少しでも長い時間トモ子のそばにいて、彼女の力になってやりたいのですが、いっぽうでは、徐々に暗くなっていく家の雰囲気から逃れていたいとも思っただのです。

でもトモ子は、沈んでいるばかりではありませんでした。持ち前の明るさと社交性を発揮して、近所の人たちとのつながりを広げ、また昔の演劇仲間などとの交流を再開させ、私が仕事で家にいない時間帯を自分なりに有意義に過ごすようになっていきました。

そして、やがて私たち夫婦も、「子どもがいない現実」を少しずつ受け入れていくようになりました。私が仕事から帰ったときには、以前ふたりでよくした演劇についての話や、おたがいの仕事、交友関係の話で夜の時間を過ごすようになりました。さらに休日には、彼女が近所の人や演劇仲間を家に招いたり、私が職場の人を家に招いたり、結構にぎや

かな一日を送ったりしました。ときには、ふたりでハイキングや外食に出かけたりもしました。

私たちは、結婚前からおたがいを「トモちゃん」、「コーちゃん」（申し遅れましたが、私の本名は「とちぎこうじ 栃木浩二」です）と呼び合っていました。そして多くの場合日本では、子どもが生まれると、なぜか夫婦がおたがいを「おかあさん」、「おとうさん」と呼び合うという、日本語を覚え始めた外国人が聞くとびっくりするような呼び方に変わるようですが、私たちはそのような境遇に至らなかつたために、いつまでも「トモちゃん」、「コーちゃん」の新鮮な関係が続いていったのです。

ともかく、こんな家庭生活を送りながら、私は懸命にはたらき、数年前に住宅ローンの返済を終えました。そうして、昨年の3月末に私のサラリーマン人生もとうとう定年を迎えたのでした。私はこれで、少しでもトモ子に対する恩返しというか、あまり相手をして

やれなかつたことへの罪滅ぼしができるものと思っていました。

でも、定年後のことについてときどき先輩たちから話を聞かされていたのは、

「濡れ落ち葉」になるなよ」

ということでした。「濡れ落ち葉」というのは、家にいてもこれといってやることが見出せず、妻が外出するときにはいつも靴の底に「濡れた落葉」のようにくつついて後をついていく夫をたとえた表現です。こう忠告してくれた人自身がそういう境遇なのか、あるいは、いつも仕事で家に帰るのが遅かった私を心配して言ってくれたのかはわかりませんが、私にとっても「人ごと」とは思えなかつたことは確かでした。なにしろ、私もそのような夫たちのご多分に漏れず、いわゆる「無趣味人間」なのですから。

これに対する世の夫たちの「対策」としては、どうせ「濡れ落ち葉」になるなら、せめて旅行のような「楽しい外出」での「濡れ落

ち葉”でいようと、夫婦での温泉旅行のような機会を作ろうとするようです。それでも妻たちは、旅行するなら“濡れ落ち葉”といっしよよりも、気のあつた女友だちといっしよのほうを選ぶ傾向があると聞いています。

ならば、家にふたりきりである場合はどうなのか。たとえば、昼下がりに昼食も終わり、ふたりでテーブルに向かい合つて座っているときは、どのようにしてやり過ごせばいいのでしょうか。妻を無視して、テレビを見たり新聞または本を読んだりしてその場をしのぐのでしょうか。あるいは、最近はやりのスマホにクギづけになつていけばいいのでしょうか。近年私は、ファミリーレストランに入るたびに、両親と子どもがおたがい無言のままそれぞれのスマホを操作しているという、異様な光景を目にしますが、私はそのようなことをする気は毛頭ありませんし、だいいち、私はスマホなどに興味はなく、それを持つという気もありません。通常の携帯電話、い

わゆる「ガラケー」があれば十分です。

でもありがたいことに、私のこうした心配はトモ子のおかげで杞憂きゆうに終わりました。私とふたりきりで対面したときも、彼女は豊富な話題の引き出しを開けて、次々に私に語りかけてくれました。しかもその話の内容が適格であり、さすがに役者を目指しただけであった、語り口調も感情がこもっていたのでした。だから私たちには、当初恐れていた、ふたりきりでいるときのあの“沈黙のひと時”は一瞬たりとも訪れなかったのです。トモ子は結婚以来数十年間、様ざまな精神的苦悩にさいなまれながらも、私のことを実によく理解してしてくれたのでした。

私は家においても外に出かけても、彼女と離れていることはできませんでした。それは私が一方的につきまとう、あの「濡れ落ち葉」のような状態ではなく、おたがいがおたがいを真のパートナーとして必要とする関係であつたと思つています。

もう私たちは、どこに行くにもいつしよでした。当初私は、これまでの罪滅ぼしで彼女に「奉仕してあげる」つもりでいましたが、いまでは彼女といること自体がよろこびになりましたので、そのように後ろ向きなつきあい方などする必要もなくなりました。残念ながら私たちは子どもには恵まれなかったけれど、こんな穏やかであわせな日々が続いていくなれば、「ふたりだけの老後」というものも悪くはないなと思いました。

しかし、悲しい別れの幕開けは突然やってきました。

10月も半ばになり、ふたりで紅葉狩りの行先など、楽しい計画を練っていた時期でした。夕方近くになり、市の健康診断に出かけていたトモ子が青ざめた顔で帰ってきました。胃のX線撮影で、すぐにも再検査が必要な所見が見つかったということでした。私も一瞬血の気が失せましたが、それでも、

「だいじょうぶだよ。どうせなんともない

だろうけど、念のためということさ」

と平静を装っていいましたが、ひきつったような表情は隠すことはできませんでした。

数日後、私はトモ子の検査入院に連れ添って行きました。ひととおりの検査が終わり、私は医師から結果を聞きました。悪性の「胃がん」ということでした。

「かなり進行している可能性が懸念されますが、外科手術でできるだけのことはやってみましょう」

とその医者はいいました。それに対して私はしばらく、何が何だかわからずにぼうつとしていました。ようやく蚊の鳴くような声で、

「お、お願いします」

といい、それから、

「病名は、妻には告げないでください」

と頼みましたが、医師からは、

「こちらから積極的に告知することは控えませんが、ご本人から聞かれたら、虚偽の報告

をするわけにはいきません」

と、きつぱりいわれました。

私はトモ子の病室を訪れ、

「初期の胃がんだって。トモちゃん、『がん』
とはいっても、手術で取れば治るそうだ」

とありつたけの笑顔を作って語りかけました。トモ子は、さすがに「がん」という言葉を聞いて一瞬表情を曇らせましたが、すぐに笑顔になって、

「そう。じゃ、がんばってみるね」

と応えました。私は翌日も来ることを告げて、病院を出ました。

「トモ子が進行した胃がん」——これまで人ごとだと思っていたことが、身内にふりかかってきた：私は家に帰る途中ですれ違ったり見かけたりした人びとすべてが、なんだか自分の知り合いのように感じられました。思えば、こうした無数の人たちのなかには、自らか、あるいは彼らの親しい人が不治の病を患っている、という人がいたはずなのです。

いままでにはそうした人は自分にとっては「第三者」であり、冷酷に客観視できていたものでしたが、今度は自分がその当事者になってしまったのです。「死」——この、人間がもつとも忌み嫌う言葉が、これまでの「三人称」から「二人称」の世界の言葉になりかけようとしていたのです。

トモ子の手術は、それから一週間ほど経つてから行われました。思っていた以上に短時間で終わったので、「もしや『胃がん』という診断は間違いだったのでは」とよろこびましたが、結論はその逆でした。腹膜にまで転移（「腹膜播種^{はしゆ}」というのだそうです）していたので、もはや手術できる状態ではなかったとのことでした。

それからしばらく、こちらが見ているのもつらくなるほどの抗がん剤「治療」が続き、がんが小さくなって症状が「緩和」（もともと彼女には大した自覚症状もなかったのですが）したので、彼女は「退院」の日を迎え

ました。家に帰る途中ではふたりともほとんど無言でした。

家に着いてから私は、例の作り笑いを浮かべて「トモチちゃん、よかったね」と声をかけ、トモ子の顔をあらためて凝視すると、目の縁が赤くなっていることに気がつきました。彼女はすでに自分の病状を知っていたのだと思いました。きっとひとり病床で泣きはらしていたに違いありません。それでも、彼女はさすがに優れた役者でした。私に向かって、本物の笑顔を見せると、

「そうね、コーちゃん、これから温泉にでも行きましようね」

と実にうれしそうに応えました。

これ以降、再入院までの約半年間、トモ子は定期的に通院し、山のような薬を服用していましたが、彼女の容態は日常生活が送れるくらいに安定していました。このまさに一日が一年にも感じられるとても貴重な日々、私たちはおたがいに、それぞれの役を必死に演

じきっていました。すなわち、私は「妻の病気が完治すると思っっている夫」の役を、またトモ子は「そんな夫の言葉をすっかり信じきって、だまされている妻」の役を。

新しい年、いまから思うと私たち夫婦にとつて最後の新年を迎えました。

元日には、隣近所の人たちが大勢わが家を訪れました。トモ子はいつのまにか、こんなにも多くの人たちと交流を深めていたのでした。それに引き替え、かつての私の会社の同僚とのつきあいはほとんどなくなっていて、訪問する者がいないばかりか、私あての年賀状も数通届いたていどでした。

2日には、トモ子の劇団員時代の仲間たちが訪れました。そのなかには、私が見覚えのある人がいました。おうぎよしこ扇佳子さんといって、かつてトモ子が出演した『忘れ去られた苦惱』で、ヒロイン役（すなわち、トモ子の恋敵役）を演じた人です。佳子さんはいまでもときどきテレビドラマや映画の中で、どちらかとい

うとエキストラに近い脇役として出演している、いわば「知る人ぞ知る」役者です。トモ子によると、この日訪れたそれ以外の人たちはみな演劇とはもう直接関わっていないとのことでした。ともかく、この日も彼女の交流の広さというものに感心させられたのでした。

それから3カ月あまり、桜の咲く季節がやってきました。トモ子はこの間、「見納め」という言葉をときどき何気なしに使っていました。たとえば梅の咲く時期には、

「今年で梅も見納めね」

などと穏やかな口調でつぶやいたりしたものでしたが、私はそのたびにギクツとして

「何いつてるんだ、トモチちゃん。来年もまた見れるじゃないか」

といったものですが、私の下手な演技とセリフなど、とつくに彼女に見破られていたに違いありません。ともかく私はこの年のシーズンこそはどんなことをしてでも、とびきり

の桜の花を見せたいと思いました。

そこで4月の下旬、私たちは岩手県の静かな温泉地に一泊し、翌日にはかねてから一度は行ってみたいと思っていた、北上川沿いに桜並木が延々と続いている桜の名勝地を訪れました。実にうらかな春の日でした。ふたりでゆつくりと桜のトンネル道を散策していると、視線の先からのどかな観光馬車が近づいてきました。すると、トモ子は子どものように無邪気にそれを指さして

「ねえコーちゃん、あれに乗ってみたい」

といいました。彼女がこんなふうには、あれこれしたいとストレートに口にしたことはこれまでなかったことでしたが、私はためらうことなく、すぐに乗り場まで彼女を連れて行きました。

ふたりで馬車に揺られて桜並木を進んでいくと、トモ子は、

「ああ、こうしていると夢のよう。まるで天国からのお迎えの馬車みたいね」

と静かにつぶやきました。私はいつものように下手な芝居でむきになつて、この「天国」という言葉をたしなめることもできませんでした。このときこそまでして彼女の清らかな気分を壊すべきではないと思い、ただただ彼女の手を強く握りしめて、「うんうん」という感じであらずきました。私のほおの上を涙が流れ落ちました。

旅行から戻った翌日、トモ子は自分のパソコン上で、旅先で撮影した写真の整理をしていました。私もしばらくこの作業をながめていましたが、彼女の頼みで、食材の買い物に出かけました。そして家を出てからしばらくして、自分の携帯電話を忘れたことに気がつき、取りに戻りました。

トモ子は依然としてパソコンで作業していましたが、私が戻ってきたことに気づくと急にあわてて見ていた画面を切り替えて、

「ちよつと、どうしたの？」

と険しい表情になりました。私は驚いて

ケータイを忘れたことを告げ、それを手にするとすぐに外に出ました。「彼女が何か私に隠したいものがあるのだ」と思い、少しいやな気分になりましたが、「まあ、そういうことは誰にもあるだろう」と、そのときは自分を納得させました。

買い物から戻ると、トモ子は、

「コーちゃん、さつきはごめんね。女にはね、男の人には見られたくないものが一つや二つくらいはあるものなのよ」

と、いつて謝りました。でも私はもうそのときは、そんなことは意に介していませんでした。ふたりはどちらともなく自然に縁側に腰掛けて、庭の生垣とその向こうの景色をながめていました。春霞のなか、夕日がだいぶ西に傾いていました。児童公園からは子どもたちの元気に遊ぶ声が。

トモ子は私に身を寄せてかしらを傾け、私の肩にもたれかかりました。

「そろそろ夕食の支度をしようか」

「もう少し、このまま」

彼女は目を閉じました。しばらく沈黙が続いたあと、

「ねえコーちゃん、わたしがこのまま目を覚まさなかつたらどうする？」

とささやきました。私は一瞬凍りつきましたが、彼女のうっとりとした表情を見ると自分も目を閉じ、

「ハハハ、トモちゃん、なにをバカなことを…」

と弱々しく応えました。

春の夕暮のなか、私は熱いものが込み上げてきました。

「ああ、このしあわせが永遠に続いてほしい。永遠に！」

翌日の明け方、トモ子は腹痛を訴えました。彼女は私とともに病院に行き、精密検査を受けました。そしてもはや病状についての「だまし合い」をしている段階ではなかったのです。ふたりそろってその検査結果を聞きました。

がんが卵巣に転移しているとのことでした。すでに身体中にがんが転移していると思われるので、完治は望めないものの、苦痛から免れて“生活の質”を確保するには、卵巣の切除が必要とその医師は説明しました。

「よりによって、あれほど子どもを欲しがっていた女性の卵巣に転移するとは」

私はこのときほど、「がん」というものを憎く思ったことはありませんでした。すると、トモ子は、まるで自分のからだに向かって語りかけるように口を開きました。

「結局赤ちゃんを作れなかったわたしの卵巣だけれど、せめて自分の命といっしょに静かに死なせてやりたかった。それがその前に切り取られるなんて、かわいそう」

私はこの言葉を聞くと、もうこらえることができずに嗚咽おえつしました。トモ子もからだを震わせました。ふたりは医師が目の前にいるのも構わずにぽろぽろと涙を流しました。

卵巣の手術後、私たちは「緩和ケア」を選

扱しました。治る見込みのない病気に対してこれ以上形ばかりの「医療行為」を施して苦しみたくなからでした。

私はもうどんなことがあっても、最後まで“トモ子のもとを離れない決意でした。私たちは病室で、過去の楽しかったこと、つらかったことなどを夢中で語り合いました。そして悲しい現実を自覚したときには、固く手を取り合って子どものように号泣しました。

私はよほどひどい症状が出ない限りは、病気の話は極力避けていましたが、彼女が痛がっているときにその部分をさすってやりました。そうすると、彼女は心からの笑顔を浮かべて感謝するのです。

このように、一切の遠慮もない全身全霊のふれあいを重ねるなかで、ふたりの表情は徐々に穏やかになっていきました。

またこのころになると、トモ子の幅広い交友関係を反映して、多くの人たちが見舞いに訪れました。彼女はそんな人たちに対して、

ときには微笑みながら、

「わたし、もうすぐあの世に行くのよ」
などと平然と行って、戸惑わせたりするの
でした。

ある日、私たち夫婦がいる病室に男女ふた
りが見舞いに入ってきました。女性のほうは
あの、『忘れ去られた苦悩』のヒロインの扇
佳子さん、そして男性のほうは、もし私の記
憶に誤りがなければ、同じ劇で佳子さんとト
モ子の両方の女性から愛されていた男役なの
ではないかと思いました。私が彼にそのこと
を確認すると、彼はそれを肯定し、自らの名
前「三村悠介^{みむらゆうすけ}」を名乗りました。

私は、昔の劇団員同士でつもる話もあるだ
ろうと思い、しばらく席を外して病室の外の
待合所で彼らの面会が終わるのを待つことに
しました。面会は一時間ほどで終わりました。
病室から出たとき、佳子さんは少し涙ぐみな
がらも、トモ子の運命を受容した穏やかな表
情をしていましたが、三村さんはとても青ざ

めた表情をしていたのが印象的でした。

その後二週間ほど、緩和ケアが効いていたのか、トモ子は小康状態を保ちました。このころになると、彼女は、

「ねえ、コーちゃん、あのミカンの缶詰が食べたい」

などと、幼な子のように私に甘えるようになりました。このように彼女に甘えられ、頼られるのはこのときの私にとってこの上ないよろこびでしたので、私は満面の笑みを浮かべて、缶詰のミカンを一つスプーンに載せてトモ子の口元まで運んで食べさせたものです。ふたりにとって至福のときでした。

その後容体が急変して、トモ子の意識は薄れていき、うわごとのようなものを口にするようになりました。

「わたし、うまくセリフいえたかなあ」
やはり、彼女は女優になりたかったに違いありません。

「コーちゃんはやっぱり芝居が下手ね」

彼女が病気になってからの私の態度はやはりバレバレでした。

「コーちゃん、あれ読んでくれた？」

「あれ」とは何か、少し気にはなりますが、完全に夢の世界の話なのかもしれません。

それから数日間、トモ子はなんとか持ちこたえましたが、ついにお別れのとぎがやってきました。意識が混濁するなかで、最後に彼女が発した言葉は、

「コー・ちゃん、ゆ・る・し・て」

でした。私はさすがにこのときは取り乱して、トモ子の手を強く握り、

「何をいつてんだ！許してほしいのは、ボクのほうだ！」

と耳元で叫びましたが、それっきり返事はありません。

トモ子はそれからしばらくして、静かに旅立ちました。8月の初めのことでした。

約10か月間にわたる、私たちの病とのたたかいはこうして終わりました。思えば、トモ

子と私の余生は決して派手さはないものの、穏やかでよろこびに満ちたものになるはずでした。それを奪い取られた悲しみと喪失感の大きさはとてもたえようがありません。

しかしあえて誤解を恐れずにいえば、このたたかいの、特にその「最終盤」で、私たちはふたりが本音をさらけ出し、感情を激突させる機会を得られたことは本当に「よかった」と思っています。これで私は、彼女との人生を100パーセント悔いなく「生ききった」といえるのではないかと確信しています。

トモ子の葬儀には、この年の新年の集まりのように、生前の彼女の幅広い交友関係を反映して、家の近所の人たちやかつての劇団仲間など、多くの参列者が訪れました。ただこのなかには、先日佳子さんといっしょに見舞いに来たあの三村悠介さんはいまませんでした。私の精神状態は、少なくともこの葬儀のあいだ中は持ちこたえていたようです。

葬儀の式場から家にひとりで帰り着いたと

き、それまでの張りつめていた緊張感がどつと解け、代わりに言いようのない脱力感と虚無感に襲われました。私は何時間か、エアコンをきかせたりリビングでソファに横たわって寝ていたようでした。日が傾いたころ、リビングの脇の窓際を見ると、トモ子が使っていたパソコンが置いてありました。パソコンの画面（モニター）の背後の窓からは、生垣と直角に交わった生活道路があつて、隣の家の敷地と隔てています。

そういえば、以前彼女から病床で、このパソコンのログイン名とパスワードを書いたメモを手渡されたことを思い出しました。私はパソコンの電源スイッチを入れ、このログイン名とパスワードを入力しました。すると画面の壁紙に、彼女の好きだったヒマワリが咲き乱れている風景の写真が表示されました。2年前の夏、トモ子がまだ元気だったころ、私と訪れたヒマワリ畑で撮ったものです。私と並んで笑顔で写っていた彼女の顔を見て、

思わず落涙してしまいました。

私はさらにこのあと、パソコン内に保存されているトモ子が撮った写真の数々を見ました。その多くは当然のことながら、デジタルカメラが普及し始めたこの十年間のもので、私もその間の思い出を共有していました。これらの写真も、やはり涙なしには見る事ができませんでした。

気がつくくと、外はすでに夕暮のときを迎えていました。私は何とはなしに縁側に出て腰を掛けて、トモ子とよくしたように、庭の生垣とその背後の風景をながめました。日没近くとはいえ、まだかなりの暑さが残っていて、まわりからは、けたたましくセミの鳴き声が聞こえていました。

私はふと、学生時代によく読んだ『源氏物語』の内容を思い出しました。光源氏が長年連れ添った最愛の女、紫の上に先立たれて放心状態になった状態が、このときの自分の心境に重なったのでした。となると、このあと

の自分も光源氏のように、何かにつけてトモ子のことを思い出しては涙ばかり流しているだけの、いわば“生ける屍”のような余生を送ることになるのでしょうか？

「しかし……」と私は考えます。光源氏は紫の上に対して「愛している」といい続けながら、浮気を繰り返しました。光源氏は紫の上が希望していた出家をいつも妨害しました。

『源氏物語』の作者紫式部は、そのような身勝手な光源氏に罰を与えて、彼の晩年を腑抜ふぬけのようにしたのであると思います。

それに対して私は、ときとして多少の心の揺れはありながらも、浮気などはしていませんし、妻の夢をかなえてやりたいと努力しました。

「だから……」と私は独断と偏見でつまらない結論付けをしますが、光源氏の心の中には紫の上はいなかった、というより彼女は彼の心の中にいたくなかったのに反して、トモ子はいつも私の心の中にい続けるに違いありません。

せん：

そんなことを二か月以上ずっと思いながら、いまこうしてひとり庭の縁側にいます。まだしばらくは、前向きに何かをやるうといふ気にならないのは相変わらずですが、当初の心の傷はだいぶ癒えてきたような気がします。

私はいまや、「自立自助」などという無内容なお説教じみたスローガンにはうんざりしています。「他力」をあてにして何が悪いのでしょうか。自分が少しずつ立ち直っていくには、心の中にいるトモ子とまわりの人たちの力も必要であり、これからはその援助を自分のほうから求めながら生きていこうと思っています。

などと止めどもないことを考えていたら、いつの間にか秋の日が沈もうとしていました。赤い夕陽をしばらくながめていると、手の甲がむずかゆくなりました。見ると、一匹の赤とんぼが止まっていました。トモ子の分

身なのでしょうか。じつとしたまま動こうと
もしません。私は何だかいとおしい気持ちに
なり、ずっとそのままにしておきました。

やがて秋も深まっていき、紅葉の盛りを迎
えることでしょう。例えば、昨年のいまごろ、
トモ子に紅葉狩りのことを話題にしていたと
きに、あの忌まわしい病が降りかかってきた
のでした。生垣越しに見える雑木林には秋を
鮮やかに彩るカエデやイチヨウの木はなく、
全体的にくすんだ茶色に染まっています。
しかしいまの気分は、どんな美しい紅葉をな
がめても晴れそうもありません。

二

季節は進みます。

木枯らしが吹きすさんで近くの木々から何枚もの枯葉をこの庭まで運んできました。いよいよ本格的な冬が到来したようです。

私の家は、幹線道路から離れているせい、騒音などというものにはほとんど悩まされることはない実に静かな環境にあります。家でじつとしているときに聞こえてくる音といえば、夏はセミの大合唱、秋は虫の鳴き声、それに一年を通して小鳥のさえずりくらいです。あえて「騒音」に分類できる音があるとなれば、それはときどき上空を通過する航空機からの音でしょうか（この場所は羽田空港から北海道方面に向かう航空路の真下にあります）。しかしそれもはるか上空からなので、ほとんど気になるようなレベルにはありません。

このように、あまりにも「静かすぎる」環境なので、それまで都会の喧騒の中で生活し

てきた私とトモ子は、この地に引越してきた当初、「物音ひとつしない夜」に慣れてないせいか、よく寝つけなかったものでした。

いまこうしてひとり暮らしをしてみると、この「物音ひとつしない夜」のさみしさは一層心にこたえます。特に今夜のこの静寂は、いったいどういふことでしょうか。もしかしたら、雪が降りだしたのかもしれない。そう思って私はカーテンを開けて外を見ると、この地方にしては、かなり強く雪が降っていました。あすの朝にはいくらか積もっていることでしょう。

私は再び寢床に横たわって昔のことを回想しました。私の郷里は豪雪地帯で、冬になると毎年一メートル近く雪が積もりますが、そこにトモ子を初めて連れて帰ったときの、彼女の子どものように驚いた顔が思い浮かんできました。そんな感慨にふけてあれこれ思い出しているうちに、うとうと眠くなってきました。

翌朝は子どもたちの歓声で目を覚ましました。時計を見るともう9時近くです。窓の外は一面の雪景色でした。10センチくらいは積もっていたでしょう。子どもたちは、児童公園で雪だるまを作ったりしてはしゃいでいるのかも知れません。

「そうか、きょうは日曜日か」

どうも退職してひとり暮らしになると曜日の感覚がなくなるようです。

私は起き出して縁側まで出て行きました。庭を見ると、一面にうつすらと雪化粧をしていました。生垣の緑の葉の上に真っ白な真綿をかぶせた様子といい、雑木林のすっかり葉を落とした木々の枝の線に沿って白い雪の線が描かれている様子といい、何とも趣深い風情でした。やがて鉛色の空からはうつすらとした日の光が漏れてきました。そしてさらに庭先に出てみると、雪の上に点々とけもの足跡のようなものが、庭の外から軒下に向かって続いていました。そこでその延長線上

の軒下をのぞくと、そこに少し太り気味の一匹の野良ネコが丸まっています。どうやらそこで雪をしのいでいたようでした。からだの色は、どこにでもいるありふれたネコのように、白地のところどころ黒い模様を塗りたくったような感じでした。

実は私はこのネコをときどき家の近所で見かけていたのです。通常、ネコというのは臆病な生きもので、目の前で両手を「パチン」とたたいたりすると驚いて一目散に逃げているのですが、このネコはさも面倒くさそうにこちらに顔を向けたかと思うと、のそのそと歩いて去っていきます。また、散歩中のイヌに吠えられると、やはり通常のネコというものは、全速力でその場から逃げ去りますが、このネコは、「大物」なのか、それとも生存本能に欠けているのかわかりませんが、悠然とのそのそ歩いて立ち去ります。今度も軒下からこちらをじつとにらみ返しているのみで、そこから出てこようとはしませんでし

た。そこで味噌汁のだしに使う煮干しを庭に放り投げてみると、「仕方がないな、そこまでするんだったら食べてやるか」といわんばかりにの、そのそと軒下から出て、それをゆつくりと食べ始めました。このあまりに横柄な野良ネコの態度にあきれてしまったので、私は「彼」（もしかしたらメスネコかもしれない）に「ノ、ソ」と命名して、つきあっていくことにしました。

それ以降、ノソの私に対する態度はときとともに増長するばかりで、この家をすつかり自分の住み家と見なして居つくようになりました。

さてその後、暖かい日も何日かあって、庭の雪もほとんど消えかかったころ、サラリーマン時代の職場の二年先輩の、通称「げん玄さん」という人から電話がかかってきました。

「たまたま近くまで来ているので、いっしょに飲まないか」

ということでした。この玄さんは会社にい

た時分には、いつも遅くまで残って「仕事」をしていたようでしたが、私から見ても、日中はそれほど忙しそうではありませんでした。そして明らかに残業するほどの仕事がないときは、いつもきままって私を飲みに誘いました。ところが、その酒の席での話題といたらいつも、「女房はひどい女だ」とか「息子のやつはオレを軽蔑している」だといった、自分の家族に対する愚痴ばかりでした。だからこのことから察するに、玄さんが「残業」したり、私を飲みに誘ったりしたのは、よっぽど家に帰りたくなかったということなのかもしれません。

今回の「飲み会」でも、当初、

「奥さんを亡くしてさみしいだろ」

などと私に慰めの言葉をかけてはくれたのですが、そのくせ、自分の奥さんのことになると、あいかかわらず、

「オレは家にいると、いつも女房から邪魔者扱いされる」

と不平を漏らしていました。その上、少し酔いが回ると、

「栃木、おまえはひとり暮らしでいいよな」と、実にひどいことなども口にしました。私はこれにはさすがにムツときて、

「玄さん、ボクだって好きでひとり暮らししているわけじゃありませんよ」

と言い返しました。玄さんは謝りました。

「すまん、すまん。おまえがあまりさみしそうにしていけないので、ついこんな心ないことを口にしてしまった」

「そりゃ、本当はさみしいですよ」

「そうか。実はな、おれはいま『フェードブック』というSNSにはまっているんだが、おまえもどうかと思って」

と玄さんは自分のスマホを取り出して、SNS（ソーシャル・ネットワーク・サービス）の「フェードブック」(Fadebook)の画面を私に見せました。玄さん自身のページ（「タイムライン」というそうです）らしいのです

が、何の変哲もない日常生活の写真とごく短い文章からなる記事が、新しい順に掲載されているだけにしか見えませんでした。

しかし玄さんは興奮気味に話を進めました。

「ほら、きのうオレが投稿した記事に対して、こんなにも多くの友だちが『いいね!』といっけてくれているだろ。その上、中にはありがたいコメントを寄せてくれるやつもいる」

「でもそれって、友だちの投稿だったらみんな無条件に、内容もよく読まずに『いいね!』をしてやってるだけじゃないんですか。ちようどバレンタインデーに『義理チョコ』贈るみたいに」

「そうきついことをいうな。まあ確かに実際には『義理いいね』が多いかもしれないが、いくらネット上で口先だけといっても、ここまでオレをほめてくれる『友だち』を作るのはそう楽なことじゃないんだぞ。単に『友だ

ちリクエスト』を送って承認されるだけではなくて、その“友だち”のすべての投稿を欠かさずにほめちぎるとか、いろいろとその後ケアが大変なんだ。栃木、おまえも長いこと営業の仕事をやっていたから、その辺のこと、わかるだろ」

「確かにそのとおりですね。あいさつ回りして名刺を交換しただけでは、すぐにはその人と取引なんかできやしませんからね」

「そうだろ、そうだろ。オレの女房や息子なんか、ここ何年間もオレのことを『いいね』なぞいつてくれたことがない。それから比べたら、表面上だけかもしれないが、こんなに多くの人がオレの記事を『いいね!』といってくれるなんて、ありがたいことじゃないか」

私は玄さんがここまで熱心に勧めてくれるのを聞き、「なるほど、そういう手もあるのか」と思いました。トモ子を亡くした痛手から立ち直るため、この数か月間いろいろ模索してきたものの、結局は「自分というものをさら

け出せない」性格がネットクになつて人とのつながりをうまく作れないのならば、とりあえずSNSを何かのきっかけにしてみようと考え方を変えてみました。

そうして帰りの電車内でまわりを見てみると、若いも若きも、十人中、七、八人までが、手帳のようなものをじつとながめていて、なかには、忙しそうに指を動かしている人もいました。これがいま、世の人たちの心を虜とりこにしている「スマホ」というものでしょう。かつてサラリーマンのころには、何の感情も湧き起こらなかつたこんな光景をいま見ると、せめてネット上だけでも他の人や社会とのつながりをもちたいという人たちがこんなにも多いのかと思いました。

家に帰り着いてからさっそく、かつてトモ子が使っていたパソコンを久しぶりに起動しました。例の「ヒマワリ畑の壁紙」はそのままにしてありましたので、改めてまた感慨にふけりました。気がつくくと、いつの間にかノ

ソのやつも机の上にながってきて、いつしよにパソコンの画面をながめていました。日ごろの動作は鈍いものの、ネコらしい好奇心はまだ旺盛なようです。

かつてサラリーマンのころには「パソコン」といえば、営業の外回りから帰社したあとに報告書を作成するために、疲れたからだでいやいや操作していた思い出くらいしかなかつたので、少しも「おもしろい」などと感じたことはありませんでした。だから会社から、「仕事に関係しないことで、インターネットを見ないように」などというお達しがあつても、できるだけ早くパソコンから離れたいと思っていた自分にとっては、まったくの人ごとでした。

でもいまやこうして、「SNS」という新たな道を見出し、これまでに感じる事がなかったような期待感が湧いてくるのでした。

私はまず、フェード・ブックにアクセスし、適当なアカウントを作って登録してみま

した。そして、「ネコ」と「男やもめ」といういい加減なキーワードで「友だち」候補を探し、何人かの「友だち」を「獲得」しました。それぞれのキーワードで見つかった「友だち」を、「ネコ友だち」および「やもめ友だち」とでも呼ぶことにしましょう。

そして次に、玄さんの助言に従って、そのうちの「これは」と思う人にターゲットを絞って、その人の投稿に「いいね！」をしまくり、さらに「これでもか」というくらいにお世辞じみたコメントを送りました。このようなお世辞攻勢は、ベテラン営業マンだった私からすればお手の物です。

すると、その人たちから感謝のコメントが返信されたので、「しめしめ」と思い、今度は自分で投稿してみることにしました。手始めに机の上に居座っているノソの写真を撮り、これに、

「パソコンの画面を見つめるグータラなネコですが、どこか憎めないところがあります」

なるコメントをつけて投稿してみました。そうすると、しばらくしてから、何人かの「ネコ友人たち」から「いいね!」といくつかのコメントを獲得することができました。私は何だか少しおもしろくなりました。

いっぽうでは、「やもめ友だち」を対象にして、

「私は去年の夏、長年連れ添った妻を亡くしました。毎日さみしい日々を送っています」と投稿したら、ありがたいことに、「私もそうだ」とか「がんばって立ち直ってください」「い」などの励ましのメッセージをいくつかいただきました。

これに気をよくして、私はトモ子との闘病生活におけるいくつかの感動的なエピソードを紹介しました。すると、多くの「いいね!」とともに「感動して涙が出ました」などの共感のコメントも寄せられました。こうして気がつくくと、私はすっかりフェード・ブックにのめり込んでいました。

しかしやがて、このような「いいね！」と肯定的コメントをもらうことへの快感が高じてある種の中毒症状のようになり、もうとにかくどんな意味のない投稿をしてでも、絶えずこのような反響を得続けることが必要になつてしまいました。

それには、これらの良い反応を与えてくれるネット上の「友人たち」との“密接な”関係を維持しなければならず、そしてそのためには、私のほうも、彼ら「友人たち」のあらゆる投稿にいちいち「いいね！」をし、さらにできれば、気の利いたコメントまで送らなければならぬ羽目になりました。

「友人たち」のなかには、同じようにもうすでに一日中「フェード・ブツク漬け」になっている人も多く、たとえば朝起きてから夜寝るまで、やれ、「散歩をしたら、霜柱が立っていた」とか、「朝食に納豆を食べた」とか、昼にテレビのワイドショーを見て、「タレントの○○の不倫はけしからん」とか、「昼寝

をしていたら、飼っているネコから「ネコパ
ンチ」を食らって目を覚ました」とか、夕食
用に妻から頼まれて買い物に行ったら、頼ま
れもしない酒を買ってきて、「妻から怒られ
た」とか、ほぼ一挙手一投足ごとに写真付き
の投稿をアップしている人もいました。そし
てこういうまめな人たちと、「いいね！」を
無条件にやり取りする、いわば「身内」の関
係を維持するための「暗黙の掟」として、彼
らの投稿に対しては、即座に「いいね！」を
返さなければなりませんし、できればそれに
おほめのコメントを付けることも半ば強制さ
れているように感じられましたので、こちら
はパソコンを起動中にしてフェード・ブック
を開きっぱなしにし、少なくとも一時間おき
ていどには画面を確認しなければならぬ状
況になりました。

いまでは、フェード・ブックの利用者のう
ちの大半がスマホであると思われる。そう
いったスマホユーザであれば、絶えず携帯し

ているスマホ画面をときどき見ればいいのですが、私のようにスマホを持たず、パソコンからフェード・ブックにアクセスしている者は、このようにパソコンに縛り付けられる境遇によって日常生活に支障をきたすようになります。思い起こせば、いまから十年ほど前には、仲間からのメールをすぐに「既読」にしないと「村八分」にされかねないことを恐れて、つねにケータイに拘束状態にされていた高校生が存在が社会問題化されていたもので、その当時は会社で、「うちの息子が…」、「うちの娘が…」などという愚痴を同僚からしばしば聞かされても「そんなバカな」くらいにしか思っていなかったものでしたが、いまでは自分がそのバカらしさを味わうことになったわけでした。

こういう状態が続く中で、私はますますフェード・ブックにはまり、もう既存の「友人たち」から義理的な「いいね！」をもらうだけでは飽き足らなくなり、より刺激的な投

稿をして、あわよくばそれを「シェア」（共有）してもらって、「いいね！」の数を飛躍的に増やしたいと思うようになりました。

私の「ネコ友だち」の中には、ネコにあと驚くようなポーズをさせてその衆目を引き付けるような（「インスタ映えする」と呼んでいる人もいます）写真を投稿して、それがシェアされ、びつくりするような数の「いいね！」をゲットした人もいました。

ならば、わがノソ殿もさうとう変わり者のネコだから、他のネコとは違った何かおもしろい芸をするのではないかと思い、細い棒の先に毛糸を巻きつけて玉を作った道具をこしらえてみました。通常のネコならば、その棒の先を目の前で揺らすとじゃれつくものですが、しかしノソはさもわずらわしそうにそれを一べつするのみで、何の反応も示しませんでした。私がさらにその棒の先を前後左右に動かしたり、回したりしても、やはりノソは無視されました。私はついに堪忍袋の緒を切

らしてその棒でノソの頭を強くたたきました。するとノソは急に逆上して私の手をひつかき、どこかに走り去ってしまいました。まったく、なんとという芸のないネコでしょう。

こんな中、春も近づいたある日、家の外では暖かな日がさしていました。フェード・ブックの投稿ネタを探しに、散歩がてらデジタルカメラを持って外に出かけると、私は、アスファルトの路上にノソがだらしなく寝ている姿を目にしました。その道は狭い生活道路で、ほとんど車が通行することはないので、寝転がっていたところでそれほど危険というわけではないのですが、それにしても、このときのノソの格好といったら、まったく何の警戒心もなしにグタツと死んだように横たわっているような感じでした。私はそのだらしない様子を写真におさめました。するとそのとき、あるいたずら心か芽生えました。

私は家に戻ってパソコンを起動すると、フェード・ブックにログインし、この、ノソ

が寝そべっている写真を添え、外部からの検索キーワードとして使われる「ハッシュタグ」として、「#ネコ」と「#ひき逃げ」を入れて、次のような文章を投稿しました。

「ひどい！私がかわいがつていたネコがひき逃げされた。犯人はいつたい誰だ？」

すると、ときとともに私のこの投稿は、次から次へとシェアされて、みるみる拡散されていきました。そして、写真の中のネコに同情するような内容や、あるいは「ひき逃げ犯」に対する怒りの内容のコメントが多く寄せられました。

私は、最初のうちは、自分の“成果”をよろこんでいたものの、あまりの反響の大きさ（ネットの世界ではこれを“炎上”と呼んでいるようですが）に加えて、

「このネコには、どこにも傷らしきものがないさそうだ。本当にひき逃げされたのか？」

といった疑問のコメントも次第に寄せられるようになったことから、だんだん自分のし

たことが怖くなりました。そしてついに重圧に耐えきれなくなり、

「よく見たら、このネコは単に路上に寝ていただけでした。お騒がせしてすみませんでした」

と謝罪の言葉を投稿しました。

そうしたら、今度は私に対する激しいバッシングでそのサイトは炎上しました。その上、フェード・ブックの管理者からも強い警告を受けてしまいました。

これで私の「ネコ友だち」はほとんど私から去ってしまいました。当然の報いです。また少なからぬ「やもめ友だち」も私との「友だち」関係を解消しましたが、そのいっぽうで、私の過ちを許し、関係を継続してくれた人もいました。

私はこのことで目を覚まし、以後、これら“真のやもめ友だち”と節度をもった交流をネット上で続けていくことになりました。彼らはときとして私を勇気づけてくれる、本当

にいまでもありがたい存在です。

しかし結局彼らはやはり仮想空間上の存在にすぎません。もちろん、彼ら「やもめ友だち」とネット上で慰め合い、傷口をなめ合うということも有意義であり、これにより、妻のトモ子に先立たれた私の心の隙間が多少なりとも埋められることはあるのですが、私が今後求めるものとは「何かが違う」のです。